巻頭言

林業の地域性

阿部　豊

この夏，久しぶりに道南と道東方面の代表的な2，3の民有林を見学する機会をえた。本州の山は東京在勤時代に，東北から四国，九州にかけて多少の勉強をしたつもりであるが，北海道の山をみるのは，ほとんど10年ぶりである。北海道の森林全体からみれば，ごく一部をかいまみたにすぎないし，また山のみかたにしても本道の山にくわしい人たちに比べれば，まだまだ理解の程度が浅いだろうと思っている。しかし，ほんののぞきみをしただけでも，北海道はなるほど広いし，それだけにまた，道内全域にわたって地域性が大きいということを，あらためて感じさせられた。

スギ，ブナを主体とする渡島，桧山地区は北海道本来の林業とは，全く異質のもので，むしろ本州林業の延長と考えるべきであろう。ここでは，本州と同じように30 haの林地があれば，立派に企業的林業がいとなめる地帯である。また十勝地方のカラマツ林にしても，場所によって生長状態のちがいは目をみはるものがある。民有林の造林樹種は，ほぼカラマツにかぎられているように考えていたが，結構いろいろなものが試みられており，十勝の奥地でヒバまで植栽されている例がある。また数百haにわたって，トドマツの純林が天然更新によって，みごとに仕立てられており，林内にはトドマツの稚樹が理想的なかたちで自生している民有林もある。

以前は，農業も林業とならんで環境順応産業といわれたが，さいきん蔬菜などを対象とする農業は構造改善事業の進展とあいまって，土壌や気候等の立地条件を人工的にかえて，全く別な栽培環境をつくりあげることがふつうに行なわれている。水稲栽培にしてもずいぶんいろいろな環境改善が行なわれている。しかし林業の場合には，いかに構造改善事業がすすんでも大面積におよぶ造林地の自然環境を調節して生育に適当な立地条件をつくることは，ほとんど可能性がない。もっとも初歩的な林地肥培が，ようやく研究の課題としてとりあげられた段階である。したがって，林業の場合には，まずそれぞれの地域性を確実に把握して，適地適木にてっすることが立派な林をつくるための第1歩であることは，ここ当分変ることのない鉄則である。

試験研究には基礎から応用まで，いろいろな段階があるが，産業研究機関である当場の目的と使命から考えて，それぞれの地域に立脚した現地適応技術の開発に，まず最大の重点をおいて研究をすすめるべきであることはいうまでもない。そのためには，道内の必要な場所に地域研究を行なうための拠点である分場や試験地などの出先を設ける必要も当然に生じてくる。当場には，現在道南分場と道東試験地が設けられているが，それぞれの地域に必要な林業技術の確立を推進していくためには，現状はまことに弱体である。本場における総合試験場としての研究体制確立も，これからの大きな課題であるが，これとバランスをとりながら，早急に道内各地域における現地適応試験の充実を急がなければならない。　（場長）